

109 學年度第一學期 Eurasia 基金會國際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」 (16)

議題：東アジアから見た日本神話と天皇

本学期最終週の Eurasia 基金会国際講座は、中央研究院副研究員藍弘岳教授を招き、「東アジアから見た日本神話と天皇」を講演してもらった。藍教授の専門は歴史、近代思想史等の領域である。藍教授は広い角度から今回のテーマを読み解き、歴史認識と解読は主観的な解釈であり、それゆえ独立した思考能力を養うことの大切さを主眼に、参加した教員、学生にアジアの中での日本と中国文化の関係、日本神話と天皇の関係を紹介した。以下の四点について講じてくれた。

一、日本、東アジアとは何か。漢字と文化の伝播。

藍教授はまず日本の文人画、与謝蕪村の蘭亭曲水図屏風から始めた。画中の蘭亭曲水図と文徵明の蘭亭序、曲水流觴は関連している。日本の伝統には「流し雛」があり、すなわち誰もが知っている女兒の節句「雛祭り」の源流である。この節日と古代中国の三月に人々は川辺で沐浴し、禍を払う祭りを行った。藍教授は三つの重要な観点を提起した。(1) 日本的と思われている文化は必ずしも日本のものではなく、中国文化の影響を受けているかもしれない。では中国文化は本当に果てしがたいのか。(2) 中国とは何か。その定義は言語、地域、時間によって変わる。(3) 東アジア、アジアとは何か。それは漢字、漢文の伝播と関連する。東アジア、アジアという概念の形成は 19 世紀で、東アジアの定義は必ず漢字、漢文の媒介にさかのぼる。日本の新年号「令和」を例として、「年号」も中国から日本に伝わったものである。この年号は中国の『詩経』ではなく、日本最古の歌集『万葉集』から取られており、民族主義的な感じをあたえる。しかし、『万葉集』の歌は中国の経典から引用されており、関連性を切り離すことはできない。

二、古代日本人の「神」

藍教授が引用した江戸時代の国学者本居宣長は、神を「尋常の徳を越え(能力、超越的な自然力)、敬すべき対象」と定義した。日本語で「神」を訓読する漢字は古代中国の「鬼」「神」「鬼神」＝神と類似する。神は「電」の漢字にも通じるため、雷電を神格化し、天、帝に広がり、霊妙不可思議な現象、作用、能力を指すようになった。台湾で一般に信仰される媽祖などは、比較的高い道德基準から尊称して神とされるが、これと比べると日本の神はさらに自然を超越し、神奇

的な力を具えている。古代日本の神は日本列島に暮らした人々の自然信仰を起源とし、万物に霊があるという観念である。諸神（自然神、土地神）は各地の豪族が組織した政治体系の守護神となった。仏は外来神であり、「蕃神」とも称される。

三、『古事記』『日本書紀』の日本神話と本居宣長の『古事記』研究

藍教授は『古事記』『日本書紀』および各地の『風土記』の記述から日本神話を取り出し、高天原の諸神を中心的な神話体系と見なして、「記紀神話」と呼んだ。『古事記』と『日本書紀』編纂の目的は天皇統治の正統性を表わすことで、すなわち神話は天皇に関する物語の一部である。そのため記紀の編纂は当時の天武・持統天皇政権の影響を受けている。『日本書紀』は漢文で書かれ、中国の経典から採られていて、陰陽論で理解できる。『古事記』は音訓混じりである。本居宣長は『日本書紀』が漢文で書かれており、陰陽論では古代日本の思想を理解できないと論じる。それゆえ皇国を理解するには、漢心（中国伝来の漢字、漢籍中の道德原理、政治理論等）や漢意に染まっていない『古事記』がよりふさわしい。「和」「漢」および「日本」「日本人」等の概念は、本居宣長が著わした『古事記伝』によりさらに解釈が進んだ。本居宣長の論の継承と批判に対し、18、19世紀の日本で国学運動が起きた。国学は日本神話の分析を通して儒教、中国を批判し、「日本」「日本人」とは何かという問題に対し本質的な言説と論断を提出した。

四、日本神話故事と天皇の密接な関係

続いて藍教授は日本神話が天皇の祖先を講じ、主に天皇政権を合理化していると指摘する。日本神話は高天原神話、日向神話、出雲神話の三大体系に分けられ、前二者に出てくる神は天津神、後者の主神は国津神と称される。日本神話の主要ストーリーは天津神の誕生と国津神への征服過程である。また今日の天皇家と関わりのある大和政権による地方政権の征服過程を象徴している。藍教授は神話の中の天皇の祖先に関する故事と日本神話の特色を詳細に講じた。

1. 天皇の祖先：七代神の伊邪那美・伊邪那岐は日本の八大島を生んだ。後に火神によって母である伊邪那美は焼き殺され、妻を思う伊邪那岐は黄泉の国を訪れるが、妻の外貌の醜さを見て逃げかえる。伊邪那岐は黄泉の国の穢れを洗い流し、そこから天照大神、月読命、須佐之男命の三神が生まれた。その後高天原で天照大神と須佐之男命が交換した剣と玉から三柱の女神、五柱の男神が生まれた。五柱の天忍穗耳命が天皇の祖先である。天地開闢以来、日本の誕生と天皇政権は直

接つながっていると藍教授は指摘する。

2. 日本神話の特徴：次のものを包括する。(1) 多神教の世界観。(2) 高度に政治化した神話。記紀神話はある種の政治目的から作られた。天照大神の天孫降臨神話と持統天皇が皇位を孫の天武天皇に譲った一件は関連している可能性がある。(3) 日本の思想史学者丸山眞男によると、日本神話は生成型と生産型の混合した神話体系、非製作型の神に属するという。(4) 創世神話は直接民族の歴史とつながっている。

講演の最後に藍教授は明治政府の祭政一致国家構想に言及し、皇室の祭祀と神社神道を祭祀とすることで、私的領域で諸宗教信仰を認めながらも祭政一致の国家体制を完成させた。皇室の祭祀は祭政一致国家の基軸となり、学校を通して皇室尊崇の教化を進めた。しかし多くの祭祀は近代に発明されたもので、本来はなかった。現在我々が知っている歴史は主観的解釈を経たもので、歴史教育の背景にその意識形態が存在すると藍教授は述べる。では一体何が真実で、何が嘘なのか。歴史の符牒と歴史の記憶は操作されうる。教授は学生が学習過程で必ず自分で考え、独立して判断する能力を養うよう激励した。

(Web サイト:<https://Eurasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(撰稿:黄馨儀・日文系副教授)

(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)